るも朱がらかさとよむべし、朱ゑの笠とよむはわろし、朱柄笠（シユガラカサ）は紙を朱にてぬる也、柄を朱にてぬる事にはあらず、

〔古今要覽稿器財〕朱柄笠

朱柄笠はいつの頃より始りしにや未詳、弘法大師行狀繪に、白河上皇高野御幸に、腰輿にめされし、その上にさし掛たる笠の圖は、またく朱柄笠とみえたり、これやものに見えし始なるべきか、

〔萬金產業袋器財〕傘細工

朱傘、柄八尺、大さ三尺貳寸、骨數五拾本、紙は國栖を用ゆ、荏の油に色よき丹をいれ、火にかけ、よく煮（にや）してひく也、丹はからかさ壹本に壹斤づゝ入もの也、荏の油に丹をいれぬりたる物なれば、つよき事岩のごとし、されば此朱がさ、元來はみな朱ばかりを用ひしが、丹はねだんの心やすきゆへ是をもちゆ、今もいかにも朱を用ゆるもあり、丹にかぎらず、又朱にも限（ル）べからず、その好にこそよるべし、これは殿上人神祇の人、もつはら用ゆ、ゑろき袋にいれて、供奉の人これを持、但し僧徒もこれを用ゆ、源氏繪等にゑがく所是也、

〔宗五大草紙下〕からかさの事

朱柄のかさは、公家門跡、其外出家はさゝれ候、武家には大名、其外隨分の衆ならではさゝれ候はず候、大方の俗人はさゝるべからず、

〔關東兵亂記下〕景虎寄來小田原附鶴岡參詣事

京ノ公方光源院殿義輝公エ出仕ヲ致シ、關東管領ノ御敎書ヲ玉リ、朱柄ノ唐笠同御紋ノユタンヲ御免アリ、

〔甲子夜話四十六〕織田信長、中國攻ノトキ、羽柴秀吉ヲ大將トシテ發行セシム、朱傘ヲ賜テ曰、陣中コレヲサゝセテ、我ガ如ク武威ヲ張ルコト、コノ傘ノ開クニ比スベシト、秀吉畏リテ退去シ、直ニ